

「幻想」喝破し蒙を啓く

第十九回の正論大賞が、中嶋嶺雄氏に決まったことを、心より嬉しく思っています。国際政治の研究者として、私のような若輩が中嶋先生にお

お祝いの言葉

祝いの言葉をお贈りするのには、むしろ僥越です。あるのですが、先生のこれまでの言論活動を知る者としては、これはもう遅すぎるくらいに選定であったと言えましょう。周知のように、中嶋先生は、早くも六〇年代半ばに、

京都大学教授 中西輝政



中国のいわゆる「文化大革命」が、毛沢東の独裁復活のための権力闘争を本質とするスターリニズムの一現象に過ぎないことを喝破され、日本の論壇の蒙を啓かれまし

進路と論壇のあり方に与えたインパクトの大きさは、いくら強調してもしすぎることはないでしょう。中嶋先生の言論活動は、その後も一層深くかつ鋭い視野からの中国観察に基づく幾多の業績を挙げ続けてこられた。とりわけ鄧小平時代になつての「改革・開放」政策に内在する葛藤や矛盾についても早くから重要な指摘を重ね、今日の中国を見る基本的な視点を我々に提供し続けておられます。近年では、返還後の香港の行方について、いち早く現在の状況を予見され、日本国内で繰り返される愚かな「グレイター・チャイ

ナ」幻想に警鐘を鳴らしてこられています。そうした先生の鋭い問題把握は、李登輝政権の発足当初から、台湾の民主化がもつ普遍的な可能性を認識させ、多くの日本人に、それが二十一世紀のアジアに対してもつ重要な意義を気づかせてきました。日本にとって、中国問題はこれまで以上に、決定的な意味をもつようになるでしょう。日本国内に今また、各種の「中国幻想」が広がる現在、中嶋先生の言論活動は引き続き大変重要な役割が期待されます。先生の御受賞を心よりお慶び致します。

私は昭和十一（一九三六）年五月十一日に信州の松本市に生まれました。市中を流れる女鳥羽（めとば）川を裏手にした城下町の中心・中町二丁目にあった薬局の一人息子で、亡父は俳人としても活躍しており、現在満九十五歳の母も商家に生まれて育っています。松本幼稚園に三年間通ったあと、美ヶ原から流れる薄（すさぎ）川のほとりの源池国民学校（小学校）に入り、三年生のときが終戦のいわゆる「墨塗り世代」である。新憲法下を清水中学校に過ごし、生徒会のリーダー

私の生い立ち

であった。松本深志高校では山岳部員として北アルプスに登ったり、フランス語を正課として習って大学もフランス語で受験した。松本は教育に熱心な文化的な都市柄で、幼稚園から高校まで、立派な教師に出会った。また、終戦直後の小学校四年生から松本音楽院第一期生として鈴木鎮一先生にヴァイオリンを習ったり、水彩画を展覧に出品して石井柏亭先生に褒めいただいたり、陸上競技（短距離）では県新記録をつくりたりと恵まれた生い立ちであったが、

視点決定づけた文化大革命

高校一年生のときに生家が今日でいえば「倒産」、見てはならない社会の醜い裏面を見てしまった。その延長線上に大学では学生運動（全学連主流派）に熱中したが、六〇年安保の「敗北」を経て、大学院時代には既成左翼を批判すべく清水幾太郎先生らと現代思想研究会を立ち上げた頃から、中ソ論争下の中国や「毛沢東思想」への幻想から解き放たれたといえよう。やがて中国の文化大革命やわが国の大学紛争は、私の視点を決定的にしてくれた。



受賞の言葉

産経新聞社から本年度「正論大賞」の選考結果について携帯電話にお知らせを受けたとき、私は北九州市が主催したアジアの発展に関する国際会議のパーティー会場にいた。私にとっては全く思いがけないことだったので、暫くしてから謹んでお受けしたい旨のお返事をしたのだが、このところ大学行政や大学の施設にかかわっていて、言論活動に十分時間を割けない私が「正論大賞」という名誉ある賞を受けてよいものかと、一瞬戸惑わない訳ではなかった。

しかし、中国や日中関係の在り方についてのいかにも大勢順応型の言論の在り様に違和感を感じた折には、努めて発言してきたつもりでも

「感じ考えたこと、ありのままに」

あったので、「正論大賞」の受賞は、私にとって大変に嬉しいことである。だが同時に今回私が受賞したという事は、取りも直さず、中国論や台湾論ひいては日米関係や安全保障問題での産経新聞社の「正論」路線

対中問題に明快、痛烈な論旨

9・11（二〇〇一年九月十一日の米中核テロ）以降、国際情勢は一変した。このテロを契機に、世界各国の対応が揺れ動いている。日本と中国の間もこれまでもとは異なる緊張関係を持ち始めた。一部の識者は「二十一世紀は中国の時代」と言う。果たしてそうなのか。今後どのようなのか、政府は今こそ、的確な分析に基づく「国益」に沿った外交を求められているときはない。

中嶋氏は、中国の現状について「常識的に考える必要がある」と主張する。その常識とは「中国は共産党の独裁国家である」ということだ。ところが「日中友好」などの物言いが常識のレンズを曇らせている。万里の長城などの歴史的遺産を見たいということ、今の中国は違うことを取り違えてはいけないうと安易な中国観を戒める。二年に一度は一研究者として訪中し、自身の目で中国の実態を調査するフィールドワークが、現代中国を研究し、分析する中嶋氏の手法である。また、「中国は二十一世紀に

は経済大国になる。投資すれば儲かる」という論調に対しては、「幻想にすぎない」と断ずる。確かに表面上、北京や上海の都市開発は急ピッチだが、「それはあたかも家のなかの混乱を知らずに、ピカピカに飾った玄関だけを覗いて判断するようなもので、中国社会の実態とは大きく乖離している」（三月十八日付産経新聞「正論」欄）という。

産したヤオハン（豪商）を例に取り上げ、「中国と一緒に仕事ができる」というのは錯覚だ。不況だからといって、日本企業が中国に出で行ったら大変な目に遭う。経営がうまくいかなくなると合併比率を上げて、最終的に倒産という結果になる」と警告する。

とりわけ今春以来、猛威を振るった中国広東省を発生源とする新型肺炎（SARS）を例に、「その発生と初期対応の失態、事実の隠蔽とそれへの杜撰な対応という実態を通じて、中国社会の実際的な有様を全世界に晒すことになった」（六月十七日付同）と中国当局の変わらぬ閉鎖性と非透明性の体質を批判した。

中国が声高に叫んでいる台湾の統一問題でも、中嶋氏の論旨は明快である。台湾は李登輝総統（当時）のもとで完全に民主化を達成し、「住民は『台湾人』としてのアイデンティティ